

空間意識のパラダイムと古代エジプト文明理解の新見地

——空間意識としての“Ba”と“Ka”をめぐる——

佐々木 卓也

一 はじめに——目的と方法に関して——

「人間」は、地上の創造物の中で、多種多様の表情と性格を具備した、複雑で怪奇な実態である。この人間たちが、ひとつの「集合体」(Assemblage)を形成するとすれば、その実態は察するに余りあるというものである。それが、社会とか文化とか、国家とか文明とかといった「構成体(組織)」(Organization)ともなれば、実態の把握は困難を極める。

我々は、人間本体に介在する諸現象としての生理的・心理的作用によって、複雑怪奇な実態の把握を行なってきたのであった。その根本となる把握の仕方が、生科学的(Biophysical)方法と心理学的(Psychological)方法である。その成果の一般的概念として、前者には「機能」(Function)の問題が、後者には「性格」(Characteristic)の問題が挙げられよう。

前記の種々なる集合体に関しても、この二大指標によって、より明確なる実態を把握することが可能となる。つま

り、人間の知覚作用もこうした方法によって発達してゆく。「知覚」(Intellect)の対象物(Object)は、全て人間の共有する物質のないしは物性的なる主題(Subject)に昇華され、人間固有の貴重なる「所産(所有物)」(Property)として享受されてゆくのである。

この対象物は、単に人間本体に止まらず、生態系(Ecosystem)を呈する全ての物質において知覚される。我々はこの対象物に対し二大指標に従い「認知」(Perception)、「表象」(Expression)するに至って、主題化し実質的機能と性格を付与した。こうした人間の認知に始まり表象に終わる知覚(心意)作用は、対象物の中心に存在する人間にとっては、対象物の存在する「場」(Place)たる「環境」(Environment)の在り方に起因するといえよう。つまり、人間をとりまく環境は、その構成要素たる「景觀」(Landscape)の在り方によって知覚の対象物(じ)となり得るのである。

我々は、生態系を有する景觀を自然的ないしは人文的なる物質を対象として知覚してきた。空間の中に存在する人間は、かく在るか、かく在るべきかといった主題として、「空間意識」(Spatial Consciousness)を高揚させていった。つまり、人間をとりまく環境は、その構成要素たる「景觀構成」(Landscape Construction)によって対象物となりえ、それが延ては「空間意識」を左右させるに至って、いわば両者の「対応関係」(Correspondence)によって所有物となりえるのである。

こうした見地により、古代文明を支えた人々の空間意識の持ち方を、ここでは「パラダイム」を提示し、それを基に古代文明成立のプロセスを解明してゆきたい。その事例として、四大文明の中でより空間的ないしは時間的スケールに則して分析できる「エジプト」を取り上げ、古代文明理解に対する新見地を图示してゆきたい。

二 空間意識のパラダイム

(一) 人間の空間意識の持ち方

環境という空間概念は、その実態 (Substance) とその性格を見極めるといふ知覚作用によって理解される。この知覚される対象物は、その構成物たる景観そのものであり、それにまつわる諸現象 (Phenomena) である。諸現象には、行為 (Action) の差として、自然的なる物と人文的なる物とがある。この諸現象が、人間の空間に対する認知作用を刺激し、その中から我々は景観の構成と機能を認知することができる。つまり、これは空間認知に対する対物レングズであり、実質的プレバライトでもある訳である。

認知された景観は、人間の知覚の中に現象の構成・機能を意義づけ (Significance)、普遍性 (Universality) および永久性 (Permanence) を有する物質として認知作用を高揚させる。その結果、我々はその要約 (Summary) として象徴化 (Symbolism) をし、物質は物性を介して認知される。こうして、構成要素と普遍性と物質感により、規範性 (Standard) が認知され、機能因子と永久性と物性感とにより、法則性 (Principle) が認知されるのである。

我々は、規範性と法則性の両面から知覚作用の結果として、意識された (Paraphrased)、表象された、物質 (Matter) と物性 (Mind) に関する空間意識を保有することとなる。これが、いわゆる空間表象の接眼レンズであり、プロジェクトでもある訳である。我々は、そこに「文化」(Culture) と「哲学」(Philosophy) との創造物を表象することになる。これら表象空間は、かかる規範性と法則性の権化そのものである。

文化や哲学は、個人的にも社会的にも、我々人間が相互に保有する所有物である。それはまた、我々の構成する思

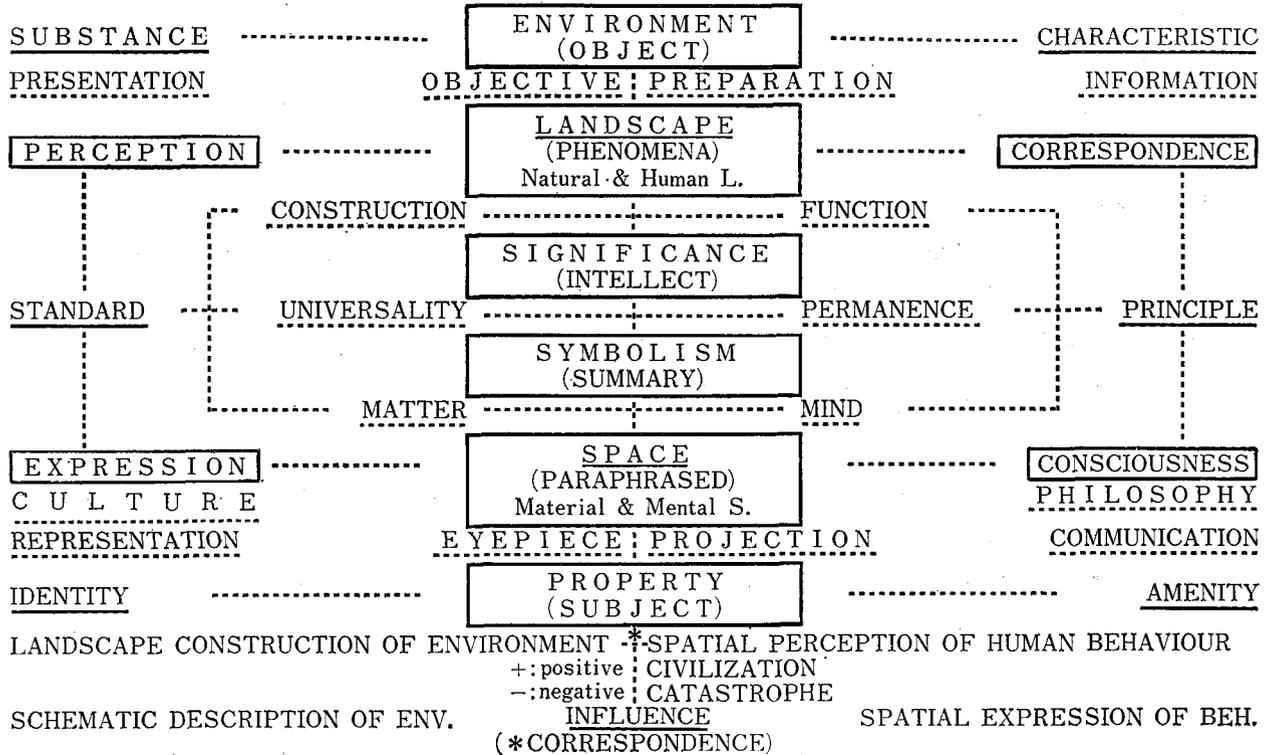


Fig. 1 Flow Diagram for Human Spatial Perception of Landscape Construction

想の主題となり得るのである。その主題を我々自身が容易に所有できるか否かで、それがコミュニケーションになり得るか否かが決定される。こうして、共有される主題は、同一性 (Identity) を呈し、同様なコミュニケーションを通じて、快適性 (Amenity) が我々に保有されるのである。

こうした意識形態は、とりも直さず「環境の景観構成」と「人間行動の空間認知」との対応関係に求められる。両者間の影響 (Influence) によって、より高次な空間意識が昇華されるのである。換言すれば、上記の対応関係において、正 (Positive) 対応は、社会的享受により「文明」(Civilization) となり、負 (Negative) 対応は、延ては「崩壊」(Catastrophe) となる訳である。社会的なる享受 (Enjoyment) は、いわゆる「民族」(Tribe) の間にかわされる「文化伝播」(Communication) と理解したい) であり、この関係が正常化すれば、民族同志は集合体として機能するのである。こうした人間の空間意識のための「範例」(Paradigm) は、図1の如くであり、筆者独自の試論である。

(二) 人間社会における空間意識

次に問題となるのは、認知され表象される環境が、如何に人間本体に享受されるのかである。この命題は、人間個人を対象とする場合と集合体を対象とする場合とは、自ら軌を一にする訳には行かない。個人を対象とする場合は、総じて人間の生態的分析で事足りるが、集団を対象とする場合は、個人・集団間におけるコミュニケーションを介した「動態」(Dynamic) として理解し、それにかかわる行動 (Behaviour) のパターンを類型化 (Typology) する必要がある。

社会組織 (Social System) における、人間の行動パターンに関する研究は、現在に至るまでにかんがりの報告がなされている。このうち、空間意識の問題を取り上げたものには、レヴィ・ストロース⁽²⁾ (Claude Lévi-Strauss) の研

究が挙げられよう。彼は「野生の思考」(Savage Mind)と「慣習化された思考」(Domesticated Mind)を挙げ、人間の知覚作用や行動作用の中に、自然現象に依拠する(Biophysical)思考と社会・文化現象に依拠する(Socio-Cultural)思考の存在することを提唱した。これに対し、バンシュール(Gaston Bachelard)は「レヴィ・ストロースの野生の思考を「夢想」(Reverie)と捉えて、諸現象が対応するとし、慣習化された思考を「科学」(Science)と捉えて、連関(関係)が対応するとした。アルチュセール(Louis Althusser)は「無想を観念(Ideology)に、諸現象を形状(Appearance)に、連関を構造(Structure)と知見を異にしてゐる。

空間の認知、ことに社会その物を対象とする場合、空間概念は人間の行動パターンを介した、いわゆる景観としての個人間の諸現象そのものであるといえる。人間間の諸現象は、基本的には自然(生科学)的な物であり、やがて社会・文化的な発展をとげる。この人間相互のコミュニケーションがよって立つ人間関係(Human Relations)が、人間の行動パターンとして有機的に結合すれば、そこには種々の景観構成が成立するのである。それを表象した物が社会構造となる訳である。

社会構造を解明するにあたり、その中に存在する諸現象の本質に対して、諸説が提唱されてきた。ヘーゲルとマルクスの空間意識の相違は、その後の諸説に大なる影響を与えた。パーソンズ(Talcott Parsons)の「適応」(Adaptation)の体系は、目標達成・潜在意識・意識集成と適応の四指標の総体で、社会構造の根幹を支える概念であると考えられる。ハイエルシュトランド(Torsten Hägerstrand)の「統合性」(Projects)は、適応体系の進展したものと考えられ、個人間の関係が等方性と抑性^{アンイソトロープ}と通過・領有性^{トランジエント・プロプライエタリ}の三類型によって理解できるとした。

こうしたヘーゲルの「市民社会」(Civil Society)に依拠する諸説に対し、マルクスの「社会構造」(Infrastructure

and Superstructure) に依拠する諸説が出現してきたのである。アルチュセールは、観念水準は経済水準から政治水準に至り昇華する物であって、社会構造は水準 (Level) の優位性^{ドミナンス}において認知され表象されるとした。この考えをさらに発展させたのがグレゴリー⁽³⁾ (Derek Gregory) であった。彼は、精神構造水準によって空間図式を表象し、社会構造水準によって空間構造を表象し、経験水準によって社会交替の空間モードを表象すると考えた。さらに、空間構造は抑圧性のシステムにおいて社会交替するとし、空間構造を通過して理解容易のモデルにおいて新たな空間図式を表象するとした。つまり空間図式を論議しようとするれば、社会構造と社会交替の空間モードをもって理解できる訳で、水準の変革は、逆もまた真なりといった画期的パラダイムを考案した。

認知される空間としての社会は、経験論者^{エンプイリスツ}にとっては社会交替の空間図式と、集散主義者^{コレクティビズム}にとっては社会構造と、形式主義者^{フォーリスツ}にとっては空間図式として理解され、レヴィ・ストロースは各々に、jig-saw puzzle-can-shaft-mahematicial formula をその表象形態にあてている。このことは、人間の空間意識は、社会構造において機能するには、雑然とした経験を通じて整然とした形式を所有することと、その反対に社会図式も整然としたものから、変革しつつ社会交替をも必要とすることを意味する。パースンズやアルチュセールやハイエルシュトランツの考えも、グレゴリーのような視点の差異により、何か別の空間意識のパラダイムが構成されれば、社会における認知—表象体系が完結するのではないであろうか。

社会構造は、いわば個人の集合体であることから、その中に存在する個人の目に映写される社会図式と、その外より観察する個人の目に映写される社会図式の間において、自ら別個の形態を呈する。我々は、複雑なる社会の実態を知るには、社会内の何を対象にするのか、論議の先に何を知らうとするのか、社会が人間にとって何を価値としてい

るのか、といった可視的なパラダイムを構築せねばならない。

(三) 研究者における空間意識

研究者における「知識」(Knowledge)の形成は、その行為(Action)と経験(Experience)が、変形しかつ内包しつつ超越することにあるとしたのは、グラナー(4) (Olavi Grano)であった。彼は、その対象となる環境に対し、現実環境から認識環境に至る自然界ネイチャーと、認識環境から認知環境に至る人間界を位置づけた。行為は自然界との回帰を、経験は人間界との回帰を表象し、知識は両界の境界たる認識環境に回帰するとした。さらに、過去↓現在↓未来の時間的変化において、行為と経験によって調査手段を構成し、それが知識となることによって科学的手段を構成し、その結果、研究者は調査方法と科学理論を入手する。そうして、行為(経験も含む)は知識を変形させ、知識は独自の世界観ワールドを構築し、一方では歴史学者の目を、他方では計画者(未来学者)の目を持たねばならないとした上で、社会構造の理解のパラダイムを考案したのである。

この考えをさらに具体化させたのが、ブッティマー(5) (Anne Butimer)であった。ここではその詳細は省略するが、彼は「生活の分野」(Genes de Vie)として、生物界と人間界との間に、生活経験から知識に至る各プロセスを考案し、技術的・社会的領域(Techno-sociosphere)において各々志向する研究が成立するとした。

これに対し、「現象環境」の中から「行動環境」に重点を置き、フランクツァッ 眞実と価値を見出したのはカーク(6) (W. Kirk)であった。自然的眞実の世界から人間行動が社会的眞実の世界を通じて、人間社会のあり方を決定するとし、諸現象は人間行動の対象となり得た際に価値を持って表象され主題化されるとした。この価値に関する問題は、人間行動が自然環境に対して制約性を持つことから、その領域は限定される訳で、反対に社会環境においてはコミュニケーション

ンを介して全ての領域に無限に適応され、両者の異なる性格によるのである。

四 本報告における有効パラダイム

以上の見解を踏まえて、最近とくに歴史・考古地理学の発展に力を注いでいるブツァー(Karl W. Butzer)のパラダイム(図2)を紹介し、全体を総括してみたい。彼は、社会構造は十分に認知できる生態系^{エコシステム}であり、その最高価値として「適応体系」(System of Adaptation)であるとされた。社会構造は変革により決定され、外的ないしは内的要因により構成(Component)されるとした。外的要因には、正なる物として生科学的諸現象、負なる物として社会・文化的諸現象が位置づけられる。内的要因には、正なる発展的現象と負なる変革的現象が位置づけられる。この四大指標によって、社会構造の現象的^{Phenomenal}下部構造(Infrastructure)が認知される。

構成された社会構造は、資源を通じて可能性を持ち変形され、技術を通じて可変性を持ち修正され、社会を通じて制約性を持ち規定される。つまり、資源は正、社会は負の要因となり技術は中間的要因といえよう。それをさらに昇華したものが、社会構造の観念的上部構造(Ideological Superstructure)たる「適応体系」である。

リーチ⁽⁸⁾(Edmund Leach)のいうコミュニケーション理論は、上記の単一なる社会の分析ではなく、互いに相接する社会において、各々を比較研究する上で有効なる方法といえよう。いわゆる、Aと非Aの両空間において、A「なる「曖昧な空間」、「隔絶された領域」、「神聖なる領域」、「禁忌の主題」、「儀礼の場所」は、互いの空間意識の対象として、認知され表象される「文化伝播」ともいえるコミュニケーションの「場」^{トポス}である。

こうした理解の上で、古代エジプト文明の成立過程を、空間意識の昇華に伴なう社会構造に求め、人間の行動と心意象を中心に動態的に理解する方法をここでは見て行きたい。この知的冒険も、決して傍若無人な研究方法ではな

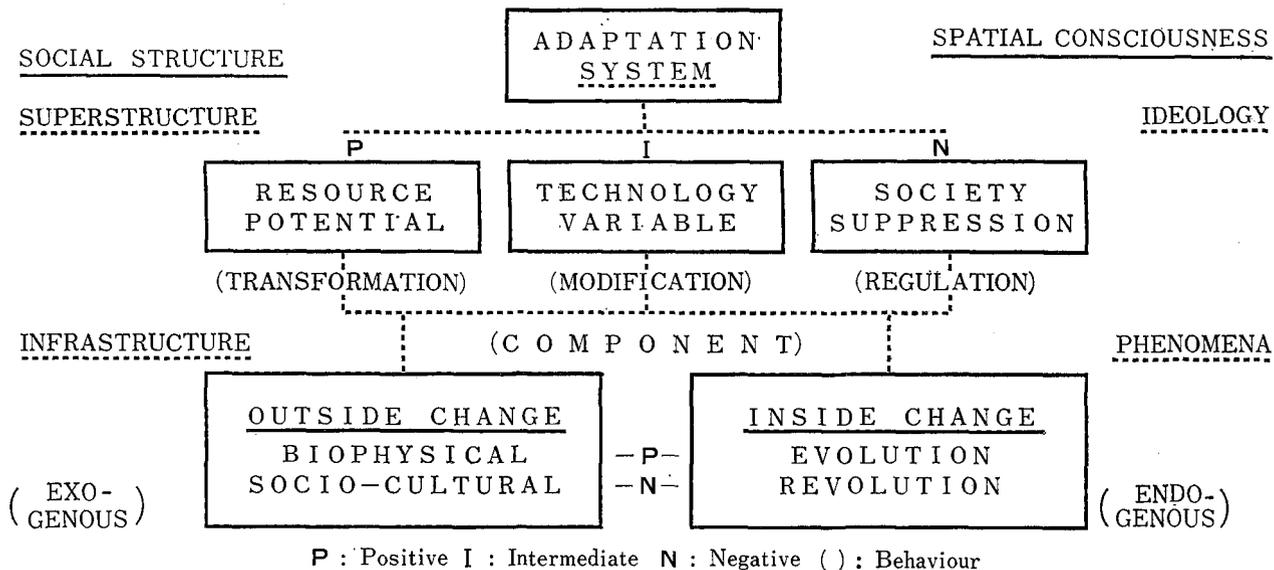


Fig. 2 Schematic Process of Adaptation on Living Environment as Human Ecosystem

いと知見するものである。

三 古代文明理解の新見地

(一) 空間意識と社会発展の相関

人間が自然環境から出現した以上、人間は自然現象をどの様に認知したのであるかが最初に論じられよう。一般的解釈として、自然景観の構成の実態を、その機能と性格において理解し、それが人間に対しどの様な影響を与えているのが次の問題である。それを人間が如何に知覚し、理解を示すのか、つまり自然景観とのコミュニケーションたる暗黙の会話において、人間の表象形態が理解できるのである。

この命題を解く鍵は、人間は地上で空气中で生存しなければならぬ宿命を帯びることである。生活環境としての空間認知の対象は、自然景観としての「地形」(Landform)と「気候」(Climate)である。この二つの景観構成の会話は、我々に「食物」^{フーズ}を表象してくれる。この対象物の認知こそ、「生」^{ライフ}＝現実および非認知＝無知なる環境「Real and Non-perceived Environment」から、人間独自の空間意識を保有する第一歩である。

食物獲得の対象として、人間は「水」の存在を認知する。水の所在は「植物」の生育を促がし、「植生」(Vegetation)としてその集合体たる「群落」(Flora)を形成させた。群落は、我々人間を含めた「動物」によって認知されて来る。動物は、食物の対象としてある種の群落を選択し集合する。そして、一つの群落はある種の動物の集合体たる「群系」(Fauna)によって占有されてゆく。人間は「食物連鎖」^{フードチェーン}の最高位に立脚する訳で、食物獲得の対象として、群落や群系といった景観構成を認知し、それによって独自の「食文化」^{フードカルチャー}を表象する訳である。さらに、これを根

幹として「衣」の文化、「住」の文化を発達させ、等質なる「文化景觀」(Cultural Landscape)を表象する集合体がいわゆる「民族」や「人種」として認知されるのである。こうして認知環境が成立するのである(9)。

形成された人間の集合体は、人間相互の行動パターンによって、人間以外の自然界たる生命体の動植物に対して共有関係を認知する。この自然現象の中から、規範性と法則性を知覚し、人間集団(=社会)内にシンボリズムとして我々は表象するのである。これが、Animism から発生する Totemism であるといえよう。

一つのシンボリズムを共有した民族は、他のそれを共有する民族に対し認知しようとする。こうした行動パターンは、しばしば対峙し衝突する現象を表象する。これがブツツァーのいう負なる「社会・文化的変革」であり、外的要因として「適応体系」の中に認知されてゆく。こうして「自生(=自)文化」(Native Culture)と「外来(=異)文化」(Foreign Culture)との融合した空間意識としての「文化的複合」(Cultural Complex)が表象されてゆく。これが、いわゆる Shamanism の対象であって、ロミュニケーションの交流する場の成立が見られる(10)のである。

ここでは、空間認知の対象としての景観構成(ローマ数字)と、空間表象の結果としての人間の行動パターン(アルファベット)を、「見地」(Stage)に従い整理してゆきた。

I : 地理的特性 (Geographical Features)

A : 人間の生活環境 (Human Living Environment)

←

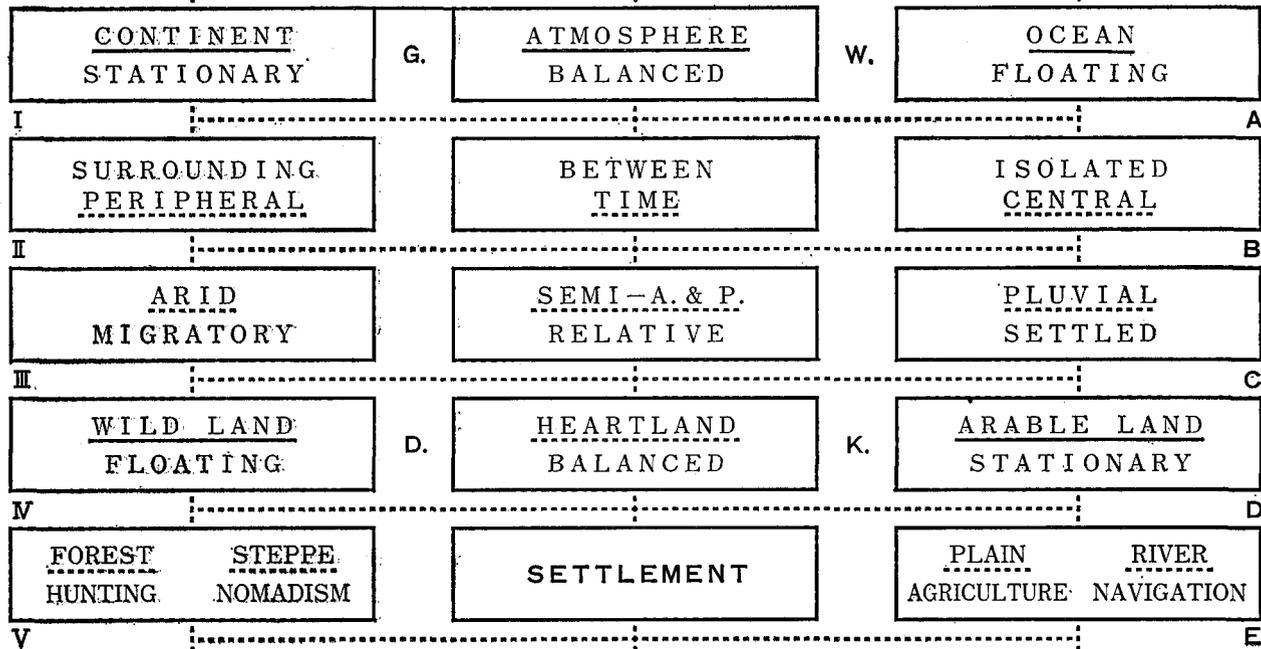
II : 気候的条件 (Climatic Condition)

B : 基礎的生活条件 (Basic Living Condition)

- ←
- III :: 植生的条件 (Vegetative Condition)
- C :: 主体的生活条件 (Main Living Condition)
- ←
- IV :: 人間の居住 (Human Inhabitant)
- D :: 安定的生活条件 (Stable Living Condition)
- ←
- V :: 地域的愛着性 (Regional Affection)
- E :: 人間の精神生活 (Human Mental Living)
- ←
- VI :: 文化的組織形成 (Cultural Formation)
- F :: 人間の多様生活 (Human Various Living)
- ←
- VII :: 古代文明の成立 (Ancient Civilization)
- G :: 人間の文化生活 (Human Cultural Living)

以上、七つのステージの昇華によって、人間の空間意識が社会発展に伴ない変化することを見てきた訳である。この
の相関関係は、空間的なる「意識軸」(Axle of Consciousness)と時間的なる「昇華軸」(Axis of Sublimity)との

REAL AND NON-PERCEIVED ENVIRONMENT



両側面によって理解できよう。この方法を基に、「古代エジプト文明」をより具体的にみてゆきたい。

(二) 古代エジプト文明成立の時空軸

古代エジプト文明の理解は、空間意識と社会発展の因果関係を我々が要約すれば、かかるステージにおける機能と性格をそこに提示することから始まる。この空間的意識軸と時間的昇華軸とによって織りなされた古代文明は、遠く空間的にも時間的にも隔絶された我々にも容易に具体的に理解されるのである。

ここでは、一つのパラダイムを示し、その理解の方法を図3によってみてゆきたい。

古代人は、「生で非認知なる環境」から「地理的特性」を認知し、その景観構成から「人間の生活環境」を表象したのであった。ここに提示された人間にとっての「地図」は、古代においてエジプトの環境を、「大陸」と「海洋」と「大気」といった景観構成と表象していた。大陸は「山陵」(アラビア語: Gebel)を通じ「静止景観」(Stationary L.)として認知され、海洋は「河川」(同: Wadi)を通じ「流動景観」(Floating L.)として認知される。両者に介在する「大気」は両景観を呈するため「平衡景観」(Balanced L.)として認知される。

この三大景観構成は、基本的には人間の空間意識となり、自然(≡生科学)的現象を呈す環境となる。河川は、生活空間においては「孤立景観」(Isolated L.)となり中心的存在として認知され、丘陵は「圍繞景観」(Surrounding L.)となり縁辺的存在として認知される。大気は「介在景観」(Between L.)として、自然環境の中では最も変化を伴なう時間的存在であると認知される。

「気候的条件」を認知した人間は、「基礎的生活条件」を表象する。気温差によって生じる気圧は「風」の発生を促し、発生源においては乾燥(Arid)し、目標地においては湿潤(Pluvial)する湿度差を生じさせる。一般的に大

陸は乾燥し、海洋は湿潤するが、むしろ風はその反対の現象をしばしば演じる。総じて河川は人間を含めた生物を「定着化」(Settled)せ、丘陵は「遷移化」(Migratory)せせる。大気はむしろ「相関的」(Relative)な性格を呈するといえる。

「植生的条件」が認知されれば、「主体的生活条件」が表象される。丘陵は「不毛地」(古代エジプト語：Dashre Land) = Wild Land)と、河川は「可耕地」(同：Keme Land) = Anable Land)と景觀構成を表象する。人間の行動パターンからすれば、丘陵は流動的性格を、河川は静止的性格を呈し、食生活の対象地域としては両者の平衡する「核心地」(Heartland)を形成する。人々の交流としては、気候条件から季節的に地域形成は性格を異にする¹¹⁾。

「人間の居住」のための環境が認知されると、人間は「安定的生活条件」を表象する訳で、これが「集落」(Settlement)である。集落には、互いに行動パターンの異なる人間の集合体たる「民族」が共存する訳で、彼等はその発地から移動してきたのであった¹²⁾。丘陵部の「森林」では「狩猟」(Hunting)が、「草原」では「遊牧」(Nomadism)が発生し、河川部の河川では「海洋(航海)」(Navigation)が、「平野」では「農耕」(Agriculture)が発生する。つまり、四大生産を文化形態のシンボリズムとする民族の誕生である。

「地域的愛着性」は発生した各民族の各々が、その対象としての自然界を認知することから開始され、「人間の精神生活」を表象することによって理解される。丘陵部も河川部も人間の生活の場である訳で、「俗」(Usual)なる空間であり、核心地たる集落¹³⁾は自らコミュニケーションの交換の場たる「聖」(Sacred)なる空間である。自然現象からすれば、「超越」(Trans)となり、人文現象からすれば、「習合」(Mixture)となる訳で、総じて「禁忌」と「儀礼」¹⁴⁾の場¹⁵⁾として表象される。丘陵部は「不毛地」として「あの世」(Next World)と認知され、河川部は「可

耕地として「この世」(This World)と認知された。

(三) 空間意識としての「Ba」と「Ka」をめぐって

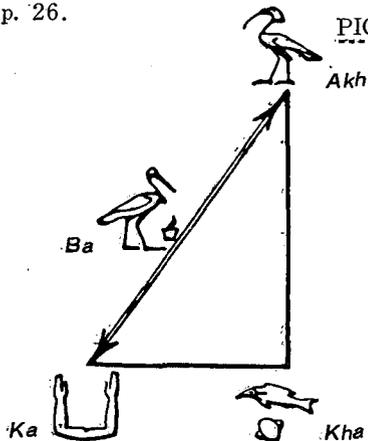
古代エジプトにおける空間意識は、古代人が使用していた「言語」(Language)によってより鮮明に理解できる。その認知の「起源」は、「絵画描写」(Picture-Writing)によって、古代人の「知覚形態」から、その「表意文字」(Ideograms)と「象徴化」(Symbolism)を醸し出す。「絵画的意味」(Pictorial Meaning)は、実態として絶対的・発展的な表象として理解され、「限定詞」(Determinatives)は、性格として普通的・総称的な表象として理解される。さらにそれらは、「表音文字」(Phonograms)と「発音」(Pronunciation)とにより表象され、音の意味を保有する。こうして、エジプトにおける言語の「記号」(Signs)としての「聖刻文字」(Hieroglyph)が成立するのである。これには「音節」(Literal)が、単↓二↓三音節と表記されれば、アルファベットのなものから、単語的なものとなり、母音ヴューヴェルと子音コンシューナントから、名詞・動詞・形容詞等が表象される。こうした表記によって、ヒエログリフの描写する空間意識が表象され、形態として整備されていったのであった。ここでは、ガーディーナー(G)(Alan H. Gardiner)のパラダイムを修正したものを提示し、図4の如く表示したい。

認知空間に対して、人間は正なる対応として「生」(Life)と、負なる対応として「死」(Death)と理解する。この二つの対応が根本的な空間意識であり、それが人間の生活環境の異なる「民族」となれば、自ら異なった死生観を呈するのである。我々は、それを前述のヒエログリフから読みとり、その実態と性格を位置づけ、「聖」なる空間を理解せねばならない。

大陸(=丘陵部)に生活環境を持つ民族のうち、狩猟民は野鳥(Bird)を“*Aku*”(カ)と、遊牧民は家禽(Poultry)

LEGEND

Lucie Lamy. 1981. Egyptian Mysteries : New light on ancient knowledge. p. 26.



PICTURE-WRITING = EGYPTIAN INTELLECT

ORIGIN
(PERCEPTION)

IDEOGRAMS

SYMBOLISM

PICTORIAL MEANING *
(strict)
(extended)

DETERMINATIVES **
(ordinary)
(generic)

* : Substance

** : Characteristic

PHONOGRAMS

PRONUNCIATION

Akh : Bird

Ba : Poultry

Kha : Fish

Ka : Arms

PHONETIC MEANING

S I G N S

HIEROGLYPH

Unilateral

Alphabetic ***

*** : Vowel &
Consonant

Bilateral

Wordy****

**** : Noun, Verb,
Adjective & etc.

Trilateral

HIEROGLYPHIC-WRITING = EGYPTIAN LANGUAGE

(EXPRESSION)
FORMATION

Fig. 4 Chronological Diagram of Hieroglyphic Writing in Ancient Egypt

(modified after Alan H. Gardiner, 1915. The Nature and Development of the Egyptian Hieroglyphic Writing, in The Journal of Egyptian Archaeology, Vol. II, p.71.)

を「Ba」(b₂)と表象したと考えられる。前者は、生産の対象として自然景観として認知され、後者は、その対象として人文景観と認知され、正・負の空間意識であろう。自然からすれば、Akhは正＝生となり、人間からすれば、Baは負＝死となる訳で、Baは自然界と人間界とを回帰する空間概念であろう。

海洋（＝河川部）に生活環境を持つ民族のうち、農耕民は両腕(Arms)を「Ka」(k₂)と、海洋民は死せる水魚(Fish)を「Kha」(x₂)と表象したと考えられる。前者は、人間の生産の対象として人文景観を、後者は、同じく対象として自然景観を認知したものであろう。人間からすれば、Kaは正＝生となり、自然からすれば、Khaは負＝死となる訳で、Khaは自然界と人間界とを回帰する空間概念であるといえよう。

さらに、ヒエログリフでは、Baを牡羊(Ram)と、Kaを雄牛(Bull)と表象することから、遊牧民と農耕民の家畜(Livestock)を認知した結果、空間意識はなおさら強調されていったものと思われる。この理解は、ラミー(16)(Lucie Lamy)のパラダイムによって明確となったが、興味あふれる提案であった。

四 古代エジプト文明の構造

以上の空間意識に基づいた文化的組織形成は、コミュニケーションの場たる「聖」なる地域において、外的ないしは内的影響を与える結果となった。本来、「自生文化」は大陸地域にオリジンを持つものであり、狩猟・遊牧文化がそれであろう。その後、「外来文化」としては海洋地域からナイル川を遡行した北方にオリジンを持つものであり、海洋・農耕文化がそれであろう。この四大民族の空間意識において、コミュニケーションが交された結果、集落さらには都市的文化は隆盛を極めた訳である。

こうして、大陸地域に発生した自生文化は、「初期集合体」(Primary Assemblage)を構成し、海洋地域に発生し

た外来文化は、「次期集合体」(Secondary Assemblage)を構成したのであった。そうして最終的には、「組織形成」(Organization)として「社会構成」(Social Component)と「社会的適応」(Social Adaptation)が表象されたのであった。これが「古代エジプト文明」であると理解したい。因みに、ヒエログリフで表象される「聖」なる場は、風になびく旗と表象される「神」(Divine Being = God)の概念であり、「*Dj. D.*」(“Neter” [ntr])と称するものであった。つまり、この場において我々は、自然界と人間界の間におけるコミュニケーションたる「宗教」(=精神)的雰囲気」(Religious [= Mental] Atmosphere)を認知する(17)のである。

古代エジプト文明とは、環境としての景觀構成の三大要素を基盤とした空間意識と、社会発展の昇華のプロセスとの両軸によって、認知され表象された過去の人間の遺産である。こうした時空軸を我々が保有できれば、空間的にも時間的にも隔絶されたあらゆる文明も解釈されよう。こうした新なる見地をここで提起した理由は、規範性スタンダードと法則性プリンシプルに基づいた古代文明理解のための方法論的考察を目的としたことによるものである。

四 おわりに

「文明」という巨大な構造物は、各々の部分が「機能」し、それらが有機的に「統一」されなければ、「死」に至る存在であるといえよう。その中に存在する人間にとっては、文明を支えた各部分、つまり民族的集合体が「生命」を内包した実態として機能し、各々の性格を融合させなければ、永久に独自の「生活環境」を保有することはできない。古代文明の中で、殊にエジプトでは、「王朝」(Dynasty)はかなり交替したが、人々の生活は広大な地域を背景として約三〇〇〇年間継続した(18)。

こうした長期にわたる古代文明は、このエジプトのみで、各「王国」(Kingdom)の性格は、かかる空間意識の在り方に起因するといえよう。本稿ではおおまかな捕え方を行なったが、各ステージにおける精緻な分析を今後継続することにより、より立体的な理解に発展させてゆきたい。本試論に対する批判と助言を期待する次第である。

注・参考文献

(1) この問題については、

Otto Friedrich Bollnow, *Mensch und Raum*, W. Kohlhammer, 1963. では「空間」の問題を整理・解説している。

久武哲也「文化景観のランガーシュ」甲南大学紀要・文学編三九・四三、一九八〇・八三、は、C. O. サウワリーの諸論について解説している。

矢守一彦「風景のランガーシュ」古地図と風景、一九八四、筑摩書房、では現在までの諸論を解説している。

(2) Claude Levi-Strauss, *Structural Anthropology* (translated from the French by C. Jacobson and B. G. Schoept), Basic Books, 1963.

(3) Derek Gregory, *Ideology, Science and Human Geography*, Hutchinson, 1978. では、ロウイロストロースの理解から、クーゲル・マルクス・ベンシュタール・アルチェセル・ペーロンズ・クイエルシュトランドのパラダイムについて解説している。

(4) Olavi Granö, *External Influence and Internal Change in the Development of Geography*, in Stoddart (ed.), *Geography, Ideology and Social Concern*, Basil Blackwell, 1981.

(5) Anne Buttimer, *On people, Paradigms, and 'Progress' in Geography*, in Stoddart (ed.), *Geography, Ideology and Social Concern*, 1981.

(6) 前掲(3)クイエルシュトランドの解説による。

(7) Karl W. Butzer, *Archaeology as human ecology: Method and theory from a contextual approach*, Cambridge Uni. Press, 1982a.

- K. W. Butzer, Kulturanpassung: Eine Methode zur Zeitlichen Untersuchung Menschlicher Ökosysteme, in Geographische Zeitschrift, 70. Jahr., Heft 4—4, 1982 b.
- (8) Edmund Leach, Culture and Communication, Cambridge Uni. Press, 1976.
- (9) 前掲(7)一九八二とよる所見に従う。
- (10) K. W. Butzer, Die Natarlandschaft Ägyptens während der Vorgeschichte und der Dynastischen Zeit, Studien zum vor-und-frühgeschichteten Landschaftswandel der Sahara, Abt. III, in Akademie der Wissenschaften und Literatur, Abhandlungen der Mathematisch-Naturwissenschaften Klasse, Jahr. Nr. 2, 1959. ◎泉邸とよる。
- (11) K. W. Butzer, Early Hydraulic Civilization in Egypt: A Study in Cultural Ecology, The Uni. of Chicago Press, 1976, ◎治水文明の理解とよる。
- (12) David O'Connor, The geography of settlement in ancient Egypt, in P. J. Ucko, R. Tringham and G. W. Dimbleby (ed.), Man; Settlement and Urbanism, Duckworth, 1972. ◎分析とよる。
- (13) Robert M. Adams. Heartland of Cities: Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates, The Uni. of Chicago Press, 1981. は、核心地たる都市社会がメソポタミア文明の象徴であるとした。
- (14) エトアストロリチ前掲(8)とよる。
- Mircea Eliade, Das Heilige und das Profane: Von Wesen des Religiösen, Rowohlt, 1957. はこの問題を整理してゐる。
- (15) Alan H. Gardiner, The Nature and Development of the Egyptian Hieroglyphic Writing, in The Journal of Egyptian Archaeology, Vol. II, 1915. とよる。
- Ernst Cassirer, Sprache und Mythos: Ein Beitrag zum Problem der Götternamen, in Studien der Bibliothek Warburg, IV, B. G. Teubner, 1925. を参考にした。
- (16) Lucie Lamy, Egyptian Mysteries: New light on ancient Knowledge, Thames and Hudson, 1981. ◎ズラタとよる。

Alexandre Moret, *Le Nil et La Civilisation—Égyptienne—*, Albin Michel, 1937. では、「宗教上の平等」を力説した。

(17) さらに主要な古代エジプトの宗教に関しては、次の著作がある。

E. A. Wallis Budge, *The Gods of the Egyptians or Studies in Egyptian Mythology*, Volume 2, Dover, 1969.

Henri Frankfort, *Kingship and the Gods: Study of Ancient Near Eastern Religion as the Integration of Society and Nature*, The Uni. of Chicago Press, 1978.

H. and H. A. Frankfort, John A. Wilson, Thorkild Jacobsen and William Irwin, *The Intellectual Adventure of Ancient Man: An Essay on Speculative Thought in the Ancient Near East*, The Uni. of Chicago Press, 1977.

(18) 最も信用ある古代エジプト文明全般に関する著作を次に掲げる。

Alan H. Gardiner, *Egypt of the Pharaohs: An Introduction*, Oxford Uni. Press, 1961.

Hermann Kees, *Ancient Egypt: A Cultural Topography*, The Uni. of Chicago Press, 1961.

B. G. Trigger, B. J. Kemp, D. O'Connor and A. B. Lloyd, *Ancient Egypt: A Social History*, Cambridge Uni. Press, 1983.

〔付記〕

本報告は、一九八四年度・第二七回歴史地理学会大会（於横浜市文化会館）における発表を基に、同年度・第二六回日本オリエント学会大会（於慶応大学）における発表を加味し、歴史地理学およびオリエント学（ことにエジプト学）からの批判に対し修正したものである。謹んで、元会長の米倉一郎先生に本稿を献呈致します。